

保育者養成校の学生における進級時のアイデンティティと職業認知の構造

西山 修 ・ 片山 美香 ・ 岡山 万里*

The purpose of this study was to identify the causal relation between ego identity and occupational cognitions, by use of Structural Equation Modeling (SEM). It utilized a Multidimensional Ego Identity Scale (MEIS; Tani, 2001) from the viewpoint of trait theory. A questionnaire was administered to 1,235 junior college students as they began their second year in childcare worker training courses. The results of SEM suggested that (1) sense of identity increased students' understanding of childcare work, and feeling of fitness to work in childcare; (2) feeling of fitness increased anticipation of enhanced feelings of satisfaction, and interest; (3) interest increased commitment with regard to childcare work and intention to continue with childcare; and (4) understanding of childcare work increased commitment.

Keywords : Ego identity, Occupational cognition, Childcare worker training, Promotion

問 題

本論では、保育者養成校に在籍する学生のアイデンティティ (ego identity; 以下、自我同一性とする) と職業認知の構造を検討する。特に2年次への進級に焦点を当て、自我同一性と職業認知に関する諸要因の因果関係を示し、保育専門職に向けたキャリア支援を考えるための一資料を提示する。

将来の方向性を自ら選択できない職業未決定、あるいは仕事社会に参入したものの当初から継続の意思がなかったり、些細なことで職業から退く早期離職など、若者の職業認知 (occupational cognition) に関わる問題が顕在化している。平成22年には大学及び短期大学設置基準が改正され、すべての大学・短期大学において、社会的・職業的自立に向けた指導等に取り組むための体制整備が義務化された。文部科学省中央教育審議会 (2011) の答申「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の

在り方について」では、高等教育において、生涯にわたる多様なキャリア形成に必要な能力や態度の育成と、これらの育成を通じた職業観等の価値観の形成を基礎として、学校から社会・職業への移行を見据えたキャリア教育の充実を目指す必要性に言及している。

Erikson (1959/1973) は、「青年期の発達課題は自我同一性の確立であり、その中心的な要素は職業決定である」と当初から指摘した。以来、青年期の自我同一性形成を論じる際に職業の問題は常に中核とされてきた。職業選択や職業への従事・傾倒は、いわば現実の社会に対する公的な自己定義とも言える。職業生活を通して、社会の中での自分の居場所を獲得し、自我同一性を確かなものにするこゝとできれば、逆に、離転職や職場への不適応などによって、自我同一性が脅かされることもあり得る。

自我同一性研究の一つの潮流として、特性論 (trait

岡山大学大学院教育学研究科発達支援学系 700-8530 岡山市北区津島中3-1-1

*兵庫教育大学大学院連合学校教育学研究科 673-1494 加東市下久米942-1

A Causal Structure Analysis of Ego Identity and Occupational Cognition of Junior College Students after Promotion in Childcare Worker Training Course

Osamu NISHIYAMA, Mika KATAYAMA, and Mari OKAYAMA*

Division of Development Studies and Support, Graduate School of Education, Okayama University, 3-1-1 Tsushima-naka, Kita-ku, Okayama 700-8530

* The Joint Graduate School (Doctor's Course) in Science of School Education, Hyogo University of Teacher Education, 942-1 Shimokume, Kato 673-1494

theory)の観点に立つ研究群がある。特性論では、パーソナリティを構成する比較的多数の単位に分類し、それぞれの程度を量的に測定し、それらの測定値の組み合わせによって個人を記述しようとする(八木, 1994)。谷(2001)は, Erikson (1950/1977, 1980, 1959/1973, 1968/1973)の自我同一性の概念を忠実に尺度化し、同一性の感覚(sense of identity)を測定する、信頼性・妥当性共に十分な多次元自我同一性尺度(Multidimensional Ego Identity Scale; MEIS)を開発している。諸変数との因果関係を考察するには、特性論の観点に立つ尺度が有用である。そこで本論では谷(2001)のMEISを用い、同一性の感覚と職業認知に関する諸変数との関係を明らかにする。

本論は、保育者養成校に通う短期大学生を対象とする。保育職は、少子化、家族形態の多様化、地域共同体の弱体化などを背景として、子どものみならず家庭への支援者として、近年、その社会的役割が拡大している。求められる専門性の高まりとともに、保育者養成の教育課程は過密化して久しい。周知の通り、Erikson (1950/1977, 1980)は、自我同一性が確立される前の自由な実験期間を「心理社会的モラトリアム」という概念で説明しているが、保育者養成校の学生にはこのような猶予期間はほとんどないのが実状である。その点で、入学後に猶予や試行の時間を持つ一般大学生とは幾分学生生活を異にする。加えて保育者養成校の学生は保育職という特定の職業を念頭に入学を受け、入学し、教育を受けている。一定の職業観と意欲をもって入学している点も特徴的であると言えよう。

他方、保育職への夢を抱いて入学してきた者も、決して順調に保育職へ就くわけではない。自分自身への問いかけとして顕在化することも少なくない。具体的には、「自分は本当に保育者に向いているのか」「保育職を選んでよかったのか」という再思の問いである(西山・田爪・富田・中川, 2004)。これらの問いは入学後、職業選択の幅が比較的広い一般大学生が多様な業界、職種、労働形態の中から「自分は何に向いているのか」「何になりたいのか」という模索の問いを立てることと様相が異なる。さらに、卒業と同時に、育てられる者から育てる者へと変容することが求められる保育職は、この点で自我同一性や職業認知を強く反映する職種といえる。

西山・田爪・富田(2006)、及び西山・富田・田爪(2007)では、保育者養成校入学期及び卒業期における学生の自我同一性と職業認知との関係を明らかにしている。具体的には、同一性の感覚と職業認知に関する諸変数の因果モデルを構成し、その妥当

性の検証と部分的評価を通して、自我同一性と職業認知の構造を明らかにした。この研究では、自我同一性という特性が、職業への適性感や将来の予期に影響を与え、さらに関心や興味に通じて、職業への傾倒や人生における職業の占有状況に影響するという過程を想定し、因果モデルを構成し検討した。その結果、「保育職の適性感」が職業認知に関わる様々な変数に正の影響を及ぼし、「充実感・満足感の予期」といった将来の見通しや、「関心・興味」といった動機付けの側面、さらには「保育職への傾倒」「継続の意思・重要さ」にまで影響を与えていることが示された。また、その「保育職の適性感」を強く規定しているのが他ならぬ「同一性の感覚」であることも明らかとなった。自我同一性の形成の有り様が、職業への相応しさの感覚と結びついており、自我同一性の形成が、職業認知の基盤となることが明示された。

本論では、2年次への進級直後に焦点を当てる。短期大学の場合、通常、入学年度と卒業年度の2年間となる。2年次への進級に伴い、教職員や家族等からも就職や進路に関する働きかけが増え、友達の動向も気になりながら、自らの進路を決めていくことになる。そのため多くの場合、保育職への採用試験が迫る2年次への進級は、自我同一性と職業認知との関係に影響を及ぼしている可能性がある。そこで従来の研究ではほとんど焦点が当てられることなかった進級時に注目し、学生への支援に向けた端緒として、何に働きかけることが効果的かを考えるために、養成校進級期における学生の自我同一性と職業認知の構造を明らかにするものである。なお本論では、「職業認知」を職業への適性感、将来の職業生活への予期、関心や興味などを広く含む、職業の捉え方の総体として扱う。

方 法 調査対象

関東、中国地方の短期大学4校において調査を実施した。調査は各大学の担当教員に依頼し、講義中に無記名集団式で行った。この際、十分な記入時間を取るよう配慮した。全被調査者のうち、社会人入学者等の年長者(23歳以上)を除き、後述の分析に必要な質問項目すべてに回答のあった1,235名(女性1,203名、男性32名)を分析対象とした。被調査者は調査実施日の出欠状況等により多少異なるが、西山ほか(2006)、及び西山ほか(2007)とほぼ同一である。

被調査者はすべて2年次生であり、保育者養成課程に在籍する学生である。年齢別の人数は19歳が

1,027名, 20歳が194名, 21歳が12名, 22歳が2名であった。平均年齢は19.18歳 ($SD=.43$) であった。

調査時期

2003年から2005年の3回, いずれも2年次への進級直後の4月下旬から5月上旬に実施した。

調査内容

同一性の感覚 谷(2001)により尺度化された、「同一性の感覚」を測定する尺度 MEIS を用いた。本尺度は次の4つの下位尺度から構成され, 自我同一性の形成状態の程度を知ることができる。すなわち, ①自己斉一性・連続性: 自己の不変性及び時間的連続性の感覚 (e.g., いつのまにか自分が自分ではなくなってしまったような気がする)。②対自的同一性: 自己についての明確さの感覚 (e.g., 自分が望んでいることがはっきりしている)。③対他的同一性: 本当の自分自身と他者からみられているであろう自分自身と一致するという感覚 (e.g., 自分は周囲の人々によく理解されていると感じる)。④心理社会的同一性: 自分が理解している社会的現実の中で定義された自我へと発達しつつあるという感覚 (e.g., 現実の社会の中で, 自分らしい生き方ができると思う) である。各5項目, 計20項目から成る。回答は「非常にあてはまる」「かなりあてはまる」「どちらか」としてあてはまる」「どちらともいえない」「どちらか」としてあてはまらない」「ほとんどあてはまらない」「全くあてはまらない」の7段階評定(7~1点)で得点化した(反転項目はこの反対で得点化)。

保育職の理解 「保育という職業を, わたしは理解している/よき保育者になるために何をすればいいか理解している(以下, 「保育職の理解」)」の2項目を設定した。回答は「非常にそう思う」「かなりそう思う」「ややそう思う」「どちらともいえない」「ややそう思わない」「かなりそう思わない」「全くそう思わない」の7段階評定(7~1点)で得点化した。

保育職の適性感 「保育という職業は自分の適性に合っている/能力を活かすことができる(以下, 「保育職の適性感」)」の2項目を設定した。回答は「非常にそう思う」から「全くそう思わない」の7段階評定(7~1点)で得点化した。

充実感・満足感の予期 「保育という職業によって充実感を得るだろう/満足感を得るだろう(以下, 「充実感・満足感の予期」)」の2項目を設定した。回答は「非常にそう思う」から「全くそう思わない」の7段階評定(7~1点)で得点化した。

関心・興味 現在の自分が保育という職業とどのように向き合っているかを問うための指標の一つと

して, 「保育という職業に関心がある/興味がある」の2項目を設定した。回答は「非常にあてはまる」から「全くあてはまらない」の7段階評定(7~1点)で得点化した。

継続の意思・重要さ 保育職の継続の意思を具体的に問う質問として「事情が許すなら保育職をどれくらい続けたいですか」と問い, 数値で年数を回答するよう求めた。定年を60歳としたため, 回答は0~40年の範囲をとる。

また, 職業認知を問う1つの測定法として「サークルテスト(Circle Test for Occupational Cognition)」を試みた。これは個々人の人生において職業の占める割合を数量的に問うものである(西山ほか, 2006; 西山ほか, 2007)。これにより, 将来の生活における職業(保育職)の時間的な占有や重み付けの見通しを投影法的に知ることができる。具体的には「次の円が, これからのあなたの人生全体(未来)を示していると仮定して, 大切なことを順に挙げ, あなたのイメージを最もよく表すように円を区切って下さい。それぞれ何を表すか記入し, そのなかで職業としての保育が占めるウェイト(割合)を示して下さい」とした。

保育職をどれくらいの重要さをもって捉えているか, 相対的な重みを問うため, 職業としての保育以外にもすべて記入を求めた。そして, 人生全体を見渡した中で, 保育職が占有する割合を視覚的, 数量的に測定しようとするものである。調査用紙には, 直径9cmの円に, 円の中心から真上の円弧まで直線を引いたものを用意した。分析にあたってはそれぞれの回答の角度を測定し, その数値を用いた。よって回答は0~360度の範囲をとる。これら2つの質問をあわせて「継続の意思・重要さ」とした。

保育職への傾倒 「保育者としてやっていくために, いま自分で何かしている/授業以外に, 自分で保育に関する本や雑誌, 番組をみる(以下, 「保育職への傾倒」)」の2項目を設定した。ここで傾倒とは, 職業に対して自らかかわろうとする投入の程度を指す。行動レベルで職業にいかにかかわろうとしているか, 具体的な質問項目を設定した。回答は「非常にあてはまる」から「全くあてはまらない」の7段階評定(7~1点)で得点化した。

回答は無記名とし, フェイスシートとして「所属」「学年」「性別」「年齢」等の記入を求めた。ただしデータ整理のため, 学籍番号の記入は求めている。調査対象にはデータはすべて統計的に処理し個人を特定することはないことを伝え, 同意を得た上で調査を実施した。

結果と考察

変数の確認と分析モデルの設定

分析は西山ほか(2006)及び西山ほか(2007)に準じ共分散構造分析(豊田, 1992)を用いた。統計処理には IBM SPSS Statistics 19, 及び Amos19 を使用した。表1には、以降の共分散構造分析で用いる潜在変数及び観測変数を示した。潜在変数名は西山(2009)により統一している。表1右欄には入学期, 進級期, 及び卒業期の各観測変数の平均値, 標準偏差を参考値として示した。また, 表2には, 観測変数間の相関行列を示した。

今回の分析に用いたデータによる探索的因子分析(最尤法・Promax 回転)の結果は想定に沿うものであった。そこで, 各変数間の関係を包括的に検討するため, 先行研究(西山ほか, 2006; 西山ほか, 2007)に基づき, 因果モデルを設定した。自我同一性という特性が, 職業の理解や職業への適性感, 及び将来の予期に影響を与え, さらに関心や興味を通じて, 職業への傾倒や人生における職業の占有状況に影響するという過程を想定し, 因果モデルを構成した。本モデルの特徴の一つは, 「同一性の感覚」から「保育職の理解」及び「保育職の適性感」への

影響過程を始発として, 保育職への関心・興味, 行動などにどのような影響を及ぼしているか注目する点である。職業と自らを見つめ, 擦り合わせることで得られる職業への適性感を通して, 職業への関心や具体的な行動が成されるというモデルを想定した。また前述の因果の流れを想定しつつ, 表1に示した7個の構成概念に対応させ, パス図として表現したものが図1である(後述する分析結果も併記してある)。

なお後述のモデル適合性の検証には, 適合度指標(Goodness of Fit Index: 以下, GFIと略記), 修正適合度指標(Adjusted GFI: 以下, AGFI), 比較適合度指標(Comparative Fit Index: 以下, CFI), CAIC(Consistent Akaike's Information Criterion), 及びRMSEA(Root Mean Square Error of Approximation)の指標を用いる。多くの文献で記載されている χ^2 検定は, データ数 N に敏感に影響を受け(豊田, 1998), 特に N が多い場合ほとんど意味がなくなることから値のみを記載する。

モデルの全体的及び部分的検証

各変数の関係を包括的に検討するため, 図1に示

表1 共分散構造分析に用いた変数, 各期の平均値, 及び標準偏差

	入学期 ($n=1,173$)		進級期 ($n=1,235$)		卒業期 ($n=1,083$)	
	平均	標準偏差	平均	標準偏差	平均	標準偏差
同一性の感覚(谷, 2001)						
X1 「自己斉一性・連続性」 5項目の合計得点	24.51	(6.31)	23.81	(6.42)	24.34	(6.42)
X2 「対自的同一性」 5項目の合計得点	22.56	(5.36)	20.67	(5.81)	21.86	(5.98)
X3 「対他的同一性」 5項目の合計得点	21.07	(5.25)	20.80	(5.35)	21.18	(5.44)
X4 「心理社会的同一性」 5項目の合計得点	21.14	(4.57)	20.48	(4.66)	21.76	(4.93)
保育職の理解						
X5 保育という職業を, わたしは理解している	—		4.76	(.97)	4.97	(1.00)
X6 よき保育者になるために何をすればいいか理解している	—		4.46	(1.09)	4.58	(1.08)
保育職の適性感						
X7 保育という職業は, 自分の適性に合っている	5.31	(1.03)	4.78	(1.19)	4.93	(1.22)
X8 保育という職業で, 自分の能力を活かすことができる	5.30	(1.03)	4.81	(1.14)	4.94	(1.14)
充実感・満足感の予期						
X9 保育という職業によって, 充実感を得るだろう	5.85	(1.05)	5.40	(1.20)	5.46	(1.20)
X10 保育という職業によって, 満足感を得るだろう	5.69	(1.12)	5.26	(1.30)	5.31	(1.24)
関心・興味						
X11 保育という職業に関心がある	6.38	(.85)	5.91	(1.13)	5.97	(1.12)
X12 保育という職業に興味がある	6.33	(.89)	5.85	(1.20)	5.85	(1.16)
継続の意思・重要さ						
X13 保育職の継続の意思(年数)	21.00	(13.98)	14.94	(13.00)	12.36	(12.24)
X14 保育職の人生における重要さ(サークルテスト)	107.94	(47.99)	91.82	(45.01)	94.45	(49.86)
保育職への傾倒						
X15 保育者としてやっていくために, いま自分で何かしている	4.95	(1.27)	4.83	(1.30)	4.66	(1.38)
X16 授業以外に, 自分で保育に関する本や雑誌, 番組をみる	4.49	(1.41)	4.84	(1.36)	4.86	(1.35)

注. 入学期は西山・田爪・富田(2006), 卒業期は西山・富田・田爪(2007)による。

した因果関係を共分散構造分析により分析し、モデル全体の妥当性を確認後、概念間の標準化された因果係数（以下、因果係数と記す）によりモデル各部の検証を行った。図1に、想定した因果関係を共分散構造分析により分析した結果を示す。考え得るパスの加除とCAIC値等の検討により確定した最終モデルである。因果係数はすべて0.1%水準で統計的に有意なもののみ示した。

まず、想定した因果関係全体の妥当性を評価するため、GFI、AGFI、CFI、及びRMSEAを求めた。その結果、GFI=.95、AGFI=.93、CFI=.97といずれも高い値が得られた。また、RMSEAは.06と当てはまりも良好であることが示された。 χ^2 値は495.34 ($df=95$)であった。構成概念から各観測変数への影響指標は.54～.94であり、構成概念と観測変数は適切に対応している。したがって、モデルとデータの適合度は十分に高く、構成された最終モデルは標本分散共分散行列をよく説明していると判断された。

次に、想定した因果関係の部分的評価を行うため、各々の因果係数を検討した。まず、外生的潜在変数として設定した「同一性の感覚」から「保育職の適性感」への因果係数は.20であり、前者は後者に正の影響を与えていることが示された。同じく「同一性の感覚」から「保育職の理解」への因果係数は.47と高い正の値が示された。さらに「同一性の感覚」から「保育職の理解」を経て「保育職の適性感」へ、間接的にも影響を与えており ($.47 \times .63 = .30$)、「同一性の感覚」から「保育職の適性感」への因果係数

の合計は、.50とかなり高い正の値が示された。確かな同一性の感覚をもつほど学生は、「保育職を理解している」と自己評価し、さらには「保育という職業は自分の適性に合っている」「自分の能力を活かすことができる」という職業と自分との適性感をもつと言える。同一性の感覚が直接的に、将来の充実感や満足感の予期に繋がるのではなく、職業への適性感を通して間接的に (.39)、規定していることも示唆された。

「同一性の感覚」から他の潜在変数への標準化総合効果を整理すると、「保育職の理解」は.47、「保育職の適性感」は.50、「充実感・満足感の予期」は.39、「関心・興味」は.38、「保育職への傾倒」は.45、及び「継続の意思・重要さ」は.28となる。また「保育職の理解」から他の潜在変数への効果を整理すると、「保育職の適性感」は.63、「充実感・満足感の予期」は.50、「関心・興味」は.48、「保育職への傾倒」は.81、及び「継続の意思・重要さ」は.35であった。

「同一性の感覚」及び「保育職の理解」は、「保育職の適性感」をはじめ職業認知に関わる諸変数を強く規定していると言える。とりわけ進級時、「保育職の理解」は、「保育職への傾倒」をかなり強く規定していることが示された。

「保育職の適性感」からの因果係数をみると、「充実感・満足感の予期」への因果係数は.78、「関心・興味」への因果係数は.43であり、いずれも前者は後者の正の規定因となっていることが示された。特に、「充実感・満足感の予期」への値はかなり高く、保育職への適性感をもつことが、将来の職業生活へ

表2 観測変数間の相関行列

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15
同一性の感覚															
X2	.50														
X3	.62	.42													
X4	.54	.56	.57												
保育職の理解															
X5	.19	.36	.21	.33											
X6	.18	.39	.22	.34	.62										
保育職の適性感															
X7	.23	.44	.21	.41	.49	.48									
X8	.22	.41	.21	.43	.50	.50	.77								
充実感満足感の予期															
X9	.20	.36	.18	.34	.44	.43	.60	.63							
X10	.20	.37	.19	.35	.46	.44	.61	.67	.85						
関心・興味															
X11	.15	.32	.12	.25	.48	.42	.63	.59	.63	.66					
X12	.15	.32	.12	.26	.47	.46	.62	.59	.61	.65	.86				
継続の意思・重要さ															
X13	.06	.21	.01	.11	.18	.17	.29	.29	.28	.28	.35	.37			
X14	.06	.20	.08	.11	.22	.22	.28	.29	.31	.32	.37	.35	.29		
保育職への傾倒															
X15	.17	.35	.15	.28	.50	.55	.50	.53	.43	.45	.54	.57	.24	.25	
X16	.08	.26	.09	.22	.40	.45	.42	.45	.38	.40	.50	.49	.27	.29	.50

注. N=1,235

の望ましい予期をもたらすことが示された。また、適性感は「充実感・満足感の予期」を経て、間接的にも「関心・興味」を規定している (.32)。さらに適性感は「関心・興味」を直接規定している。入学期、卒業期に示された適性感から「保育職への傾倒」への直接的なパスは進級時では有意でなかった。

「保育職の適性感」から他の潜在変数への標準化総合効果を整理すると、「充実感・満足感の予期」は .79, 「関心・興味」は .75, 「保育職への傾倒」は .34, 及び「継続の意思・重要さ」は .55 となる。これらのことから、「保育職の適性感」は職業認知の多くを強く規定する主要な要因であることが示唆された。

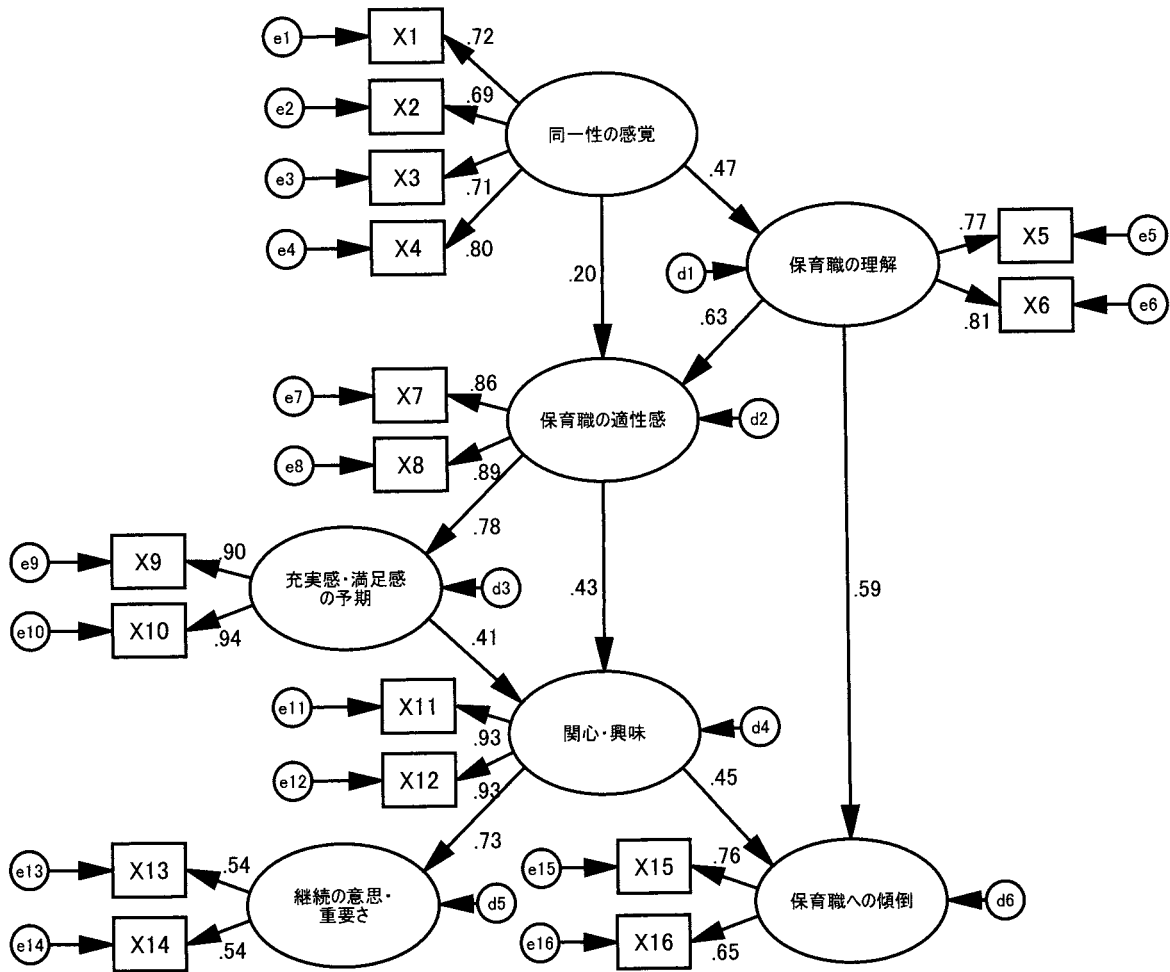
「関心・興味」からの因果係数をみると、「継続の意思・重要さ」への因果係数は .73, 「保育職への傾倒」への因果係数は .45 でいずれも高い正の値を示した。関心・興味をもつことが、職業に傾倒し、将来も保育職を継続したいという意思を強める。また、思い描く将来の中で、職業の占める重要さは大きくなる

と言える。

進級時の自我同一性と職業認知の特徴

ここまでの結果から、「保育職の適性感」が職業認知の1つの始発となり、「充実感・満足感の予期」「関心・興味」に繋がること、さらに「関心・興味」が高まることによって、行動レベルでの「保育職への傾倒」や「継続の意思・重要さ」が増大することが明らかとなった。また、進級時には「保育職の理解」が「保育職への傾倒」を増大させることが明らかとなった。そして、職業認知において重要な位置を占める適性感を強く規定する要因として、「同一性の感覚」や「保育職の理解」があることが示された。

部分的に観測変数が異なるため比較には慎重さが必要であるが、進級期の因果モデルの様相は、入学期(西山ほか, 2006)及び卒業期(西山ほか, 2007)と同様の傾向が伺える。入学期、進級期、及び卒業期の因果連鎖は類似しており、保育者養成課



GFI=.951 AGFI=.930 CFI=.965 RMSEA=.058

図1 保育者養成校の学生におけるアイデンティティと職業認知の因果モデル (進級期)

程を通じてこのモデルを想定することの一定の有効性が確認されたと言える。すなわち、「同一性の感覚」を始発として、因果連鎖においてより前にある変数が、後にある変数を逐次的に正の影響で規定している関係である。このことは逆に、同一性の感覚が低い場合、保育職への適性感は低くなり、将来の職業生活に対して充実感や満足感を予期することが難しくなる。その結果、関心や興味も低くなり、ひいては職業への傾倒や、職業を継続する意思も低くなり、思い描く将来において職業が重要な位置を占めることはなくなる、といった悪循環を引き起こす可能性も示唆している。このような同一性の感覚と職業認知の悪循環は、選択や決断において葛藤を引き起こし、職業選択や心理的社会的自己定義を回避する、同一性拡散の特徴（岡本、1999）と合致する。

進級期の大きな特徴は、「保育職の適性感」から「保育職への傾倒」へのパスがなく、「保育職の理解」から直接「保育職への傾倒」へのパスがみられる点である。卒業期を検討した西山ほか（2007）によれば、「保育職の理解」から「保育職への傾倒」へのパスはなく、「保育職の理解」から「保育職の適性感」を経た「保育職への傾倒」への因果係数は.21であった。数値は大きくないが、卒業期には、保育職への相応しさの感覚を踏まえた上で、保育職への傾倒がなされている。

養成校の学生は卒業までに、教育実習や保育実習の場で、指導者や子どもなど重要な他者との関わりから厳しい評価にさらされる機会も多い。なかには、他者からの評価をそのまま自己評価としてしまい、一面的に保育者に相応しくないと判断してしまうこともある。ただし進級時の学生の場合は、一部は実習経験を経ているものの、採用試験のような将来に直結する社会的評価の経験がまだほとんどない。また養成校での1年間における講義やその他の活動を通じて、保育職が如何なるものか日々学習し、進級時点において個々の学生なりの保育職への理解を得ているものと考えられる。そのことが直接的に将来の保育職を目指した行動に繋がっていると見える。

総括と今後の課題

本論の目的は、保育者養成校の学生を対象に、進級時における学生の自我同一性と職業認知の構造を検討することであった。具体的には、同一性の感覚と職業認知に関する諸変数の因果モデルを構成し、その妥当性の検証と部分的評価を通して、自我同一性と職業認知の構造を明らかにした。その結果、少なくとも次の点が示唆されたと言えよう。

第1に、「保育職の適性感」は職業認知に関わる

さまざまな変数を強く規定する。「充実感・満足感の予期」といった将来の見通しや、「関心・興味」といった動機付けの側面、さらには「継続の意思・重要さ」に強い正の影響を与えている。第2に、その「保育職の適性感」を強く規定しているのが「同一性の感覚」及び「保育職の理解」である。自我同一性の形成の有り様が、保育職の理解や職業への相応しさの感覚と結びついている。自我同一性の形成が、職業認知の基盤となる。第3に、進級時の特徴として、「保育職の理解」が「保育職への傾倒」を強く規定している。入学期、卒業期にみられる「保育職の適性感」から「保育職への傾倒」へのパスはない。しかしながら第4に、進級期の構造は、入学期・卒業期と類似しており、因果関係について概ね同じ流れを想定してよいと思われる。このことから、保育者養成校において、この因果モデルを想定することの有効性が改めて示されたと言える。

これらの点から、保育者養成校学生の自我同一性と職業認知に関する支援を今後考えて行く上で、次のことを指摘できる。

まず、自我形成と職業認知には深い関係があることが改めて明示されたことから、自我同一性を育むという視点が、今後益々必要であることが示唆されたと言える。この点に関して東・安達（2003）は、自己理解が不在のまま就職活動に終始することがないように、早い段階からの働きかけが重要であると述べる。現実には、自己理解のないまま活動を開始し、内定が決まったにもかかわらず不全感や迷いが起こるケースも少なくないことが推察される。本人が自らの自我同一性の一部として職業を選択し、働くことの意味を実感できなければ、早期離職や不適応を招くことにもなる。

次に、「保育職の適性感」を育むことが1つの焦点と言える。適性感は相応しさに関する感覚であることから、保育職の理解と自己理解との擦り合わせによって生まれる。「保育職の適性感」を育むことは、養成校における既存のカリキュラムや教科目の中にも比較的位置付けやすいと言える。保育に関わる学習と自己理解を有機的に結び付けた教育的働きかけが、様々な機会を捉えて実施されることが望まれる。

保育職には、地域の子育て支援の中核となる保育所等の児童福祉施設、幼稚園、認定こども園等において、家庭や地域社会との連携を促進することが期待されている。教育・福祉領域の職種にあって一層高い専門性と職業観が求められる職域である。保育職においては、関心・興味を持ち続け、不断に職業に関わりながら専門性を高めていくことが不可欠である。仕事社会と学校機関の距離が大きく開いた我

が国では、従来、体系的な職業教育は行われず、職業選択への取り組みは基本的には個人の自主性に任されてきた(東・安達, 2003)。職業教育は、資格等取得に必要となる知識・技能といった実学のみならず、日々の学びのなかで自分と選択する職業との意識化を図り、自らが主体的に専門的職業人に移行していけるような支援が求められる。専門的職業人として職業に関わっていくために、自我同一性や適性感の確立が基盤となることが本モデルからも示唆されたと言える。

今後の課題としては、次の点を挙げることができる。第1に、調査対象の拡大である。今後、増加が予想される4年制課程や修士課程の保育者志望学生との比較を通して、養成校学生の自我同一性や職業認知の特徴がより明確になるものと考えられる。第2に、養成期における同一性の感覚、適性感など主要な要因が、卒業後の職業生活をどのように規定するか縦断的データから確認することである。これにより、本因果モデルの予測的妥当性を確認することが期待される。

謝 辞

田爪宏二先生(鹿児島国際大)、富田昌平先生(中国学園大)、横山順一先生(山梨学院短大)にはデータ収集のお力添えを賜りました。また谷冬彦先生(神戸大学大学院)より尺度使用の御了諾を賜りました。厚く御礼申し上げます。なお本論は、文部科学省科学研究費補助金(基盤研究(C)課題番号:23531095)による助成を受けています。

文 献

東 清和・安達智子.(2003). 大学生の職業意識の発達:最近の調査データの分析から. 学文社.
 Erikson, E.H. (1973). 自我同一性(小此木啓吾, 訳編). 誠信書房. (Erikson, E.H. (1959). Identity and the Life Cycle. New York: International Universities Press.)
 Erikson, E.H. (1973). アイデンティティ(岩瀬庸理,

訳). 金沢文庫. (Erikson, E.H.(1968). Identity: Youth and crisis. New York: W.W.Norton & Company.)

Erikson, E.H. (1977, 1980). 幼児期と社会1・2(仁科弥生, 訳). みすず書房. (Erikson, E.H. (1950). Childhood and society. New York: W.W.Norton & Company.)

文部科学省中央教育審議会.(2011). 今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について(答申)ぎょうせい.

西山 修.(2009). 保育者の効力感と自我同一性の形成一領域「人間関係」について一. 風間書房.

西山 修・田爪宏二・富田昌平.(2006). 家庭からの巣立ち期における保育者志望学生のアイデンティティと職業認知との関係. 家庭教育研究, 11, 1-10.

西山 修・田爪宏二・富田昌平・中川智之.(2004). 家庭からの巣立ち期における女性のアイデンティティ地位と職業意識との関係:保育者志望学生に対する予備的分析. 家庭教育研究, 9, 13-22.

西山 修・富田昌平・田爪宏二.(2007). 保育者養成校に通う学生のアイデンティティと職業認知の構造. 発達心理学研究, 18, 196-205.

岡本祐子.(1999). アイデンティティ. 氏原 寛・小川捷之・近藤邦夫・鑪幹八郎・東山紘久・村山正治・山中康裕(編), カウンセリング辞典(pp.5-7). ミネルヴァ書房.

谷 冬彦.(2001). 青年期における同一性の感覚の構造:多次元自我同一性尺度(MEIS)の作成. 教育心理学研究, 49, 265-273.

豊田秀樹.(1992). SASによる共分散構造分析. 東京大学出版会.

豊田秀樹.(1998). 共分散構造分析(入門編):構造方程式モデリング. 朝倉書店.

八木保樹.(1994). 類型論・特性論 重野純(編), キーワードコレクション心理学(pp.292-301). 新曜社.